

---

## <議事要旨> 第2回 東横堀川水辺空間デザイン会議

---

1. 開催日時 令和7年1月15日(水) 18:00~20:00
2. 開催場所 大阪産業創造館 6階 会議室C
3. 出席者  
【有識者】3名(学識経験者)  
【大阪市関連部局】建設局 道路河川部 橋梁課  
【事務局】建設局 道路河川部 河川課
4. 議 事
  - (1) 開会
  - (2) 議題「東横堀川水辺空間デザイン指針(案)について」
  - (6) その他(第1回議事要旨、第3回予定)

---

### ■要旨

- 11ページの標準断面図について、それぞれの断面タイプにおいて、柵のデザインが大きく関係する。柱部のボルト部分を埋め込むように整備すれば護岸の天端がすっきりするし、ボルト部分を護岸の上面に出せば、また、イメージが変わる。転落防止柵のトップレールについても同様であり、本指針で考え方を示せるとよい。
- 14、15ページの橋詰について、東横堀川の遊歩道とネットワークを縦断的につないでいくためには、河川空間と橋梁の関わりが非常に重要で、基本的には3径間で統一する事が望ましいが、側径間をうまく使えるところは遊歩道と連動させて積極的に利用していくのがよいと思われる。
- また、橋の架替えなどは大きなターニングポイントであり、橋の改修時に遊歩道とのレベル差を階段で処理するところもあれば、レベル差が生じるところもある。遊歩道のレベルを統一し、シームレスな動線をつくることでネットワークのバリエーションが生まれるため、今後の橋の改修・補修予定が分かれば、本指針の中であわせて整理できるとよい。
- 14ページの橋詰の空間デザインを考えるにあたり、様々ながん木のバリエーションが考えられるため、東横堀川や大阪市内の古い橋梁・がん木の写真などを事例として載せておくのもよいと思われる。
- 9ページの視点場のあり方については、様々な方向からの「見る・見られる」の状況を5、6ページの現況整理図に追記することで、その場のもつポテンシャルがわかるのではないかと。
- また、④沿川建物からの景観のあり方では、対岸を見たとき・斜景で見たときに、人のアクティビティを引き立てるような景観のあり方が考えられる。
- 現況整理図だけでなく、整備が進んでいく途中段階の様子も、最終的な理想形をスケッチなどでわかりやすく示しておくことで、より整備の進め方がイメージしやすくなる。

- 3章の各空間のデザインの考え方における「遊歩道、広場、橋下空間、橋詰、沿川建物間のアクセス路」の5つの要素を、5、6ページの現況整理図に記載することで、現況のポテンシャルを理解することができ、3章以降の各空間・各空間構成要素のデザインを考えていく上での重要な手がかりになると思われる。
- 10ページ以降の各空間のパターン1～3の分け方については、現状のパターンなのか、将来的な整備の可能性のパターンなのかを明確にする必要がある。5、6ページの現況整理図をもとに将来的な整備の可能性を検討し、現状では行き止まりとなっていたり、通路としての幅が確保できていない箇所であっても、可能な限りネットワーク化させることを目標に整備・改修を行うことが求められるのではないかと。
- 9ページの視点場について、①橋上からの景観はビスタ景観、②遊歩道からの景観や③水上からの景観はシークエンス景観、④沿川建物からの景観はシーン景観と分類される。各景観タイプによって重要なポイントが異なるため、景観タイプを意識したまとめ方とすべきである。
- 11ページの標準断面タイプの名称については、①を沿川フラットタイプ、②を堤防フラットタイプにするとよいのではないかと。
- 12ページの広場の空間デザインについても、5、6ページの現況整理図に入れる現状のポテンシャルと3章で検討する目指す空間イメージとを明確に分ける必要がある。
- 16ページのアクセス路の空間デザインについて、スロープを設置する場合は法面の発生がデザイン上の問題となる。スロープの設置が必要な位置の想定やスロープをつくる際のデザインの考え方を本指針に入れておくことで、今後の整備を進めるうえでの判断材料となる。
- 31ページの拠点がつながるネットワークのイメージ図については、基本方針にある水辺のネットワークのイメージ図を引用するのではなく、本指針の現況整理図と整合するようなものとするとうれいではないかと。
- 今回策定する指針の使い方について、誰がどのように運用するのか明確にすべき。また、デザイン会議をどのタイミングで開催するのかについても決めておくとうれい。

- 7ページの空間デザインポリシーの方向性3つについては、言葉が抽象的と思われるので、再考されたい。デザインポリシー8つについてはわかりやすい。
- 5、6ページの図で現状が書かれており、28ページで具体的な将来イメージがある。整備の途中段階のイメージや、土地のポテンシャルや管理状況、整備スケジュール・実現コストも含めた整備における課題等を整理することで、現況と将来の整備イメージがつながりやすい。
- 14ページの橋詰のデザインの考え方において、橋周辺の階段の取付け方は重要なポイントとなるため慎重に議論が必要である。橋詰から階段を降りた空間を含めて、広場・空間としての整備の検討も可能である。
- デザインの考え方とあわせて、植栽等の維持管理との関係性についても記載するべきである。公民連携による高質化をめざし、民間活力を引き出すような書き方ができると更によい。
- 30ページのネットワーク形成の進め方については、護岸改修が行われていない箇所でも北浜テラスのように暫定的・部分的な利活用が生まれる可能性もあるため、長期的な整備の中の段階のひとつとして位置づけてもよいのではないか。
  
- 5、6ページの現況整理図に、橋直近にある大きな水管橋の位置や側径間を追加し、それらをふまえたデザインの考え方を検討するとよいのではないか。
- また、橋の架替えなどのタイミングで、橋の下に遊歩道を通すのか通さないのかについては、デザイン指針内で検討するべき課題のひとつであり、橋の構造上、橋下をくぐれない箇所については、橋の補修のタイミングも含めて検討できるとよい。